【本文】

第廿六回　權を弄て墨宦婚夕を促す　殺を示して頑父再醮を羞む

はや暁かたの鯨音に驚されて、両人齊一起出つ、支度形の如く整へて、いそしく旅宿を出しかど、有繋別の惜ければ、額藏は、天の明果るまで、信乃を送ゆかんとて、許我のかたへ進んとす、信乃は額藏を送らんとて、江戸のかたへ還らんとす。仰慕と辞讓に思はずも、東天しらみにければ、今は送るによしなくて、そがまゝ列松の蔭に立在、額藏声を低うして、「和君許我へ赴き給はゞ、事大かたは成就せん。某嘗人に問しに、結城里見の諸大將は、元来許我殿の御方なれども、各自國に在るにより、只鼎足の勢ひを張るのみ。獨、横堀史在村は、成氏朝臣の冢宰なり。賞罰黜陟この人の、隨意せずといふことなし、と知れるものゝいひ侍り。そこらにこゝろし給ひね」と告れば信乃はうち点頭、「某もその事は、豫てより傳聞り。彼処へ参て由緒を述、亡父の遺志を披露して、この宝刀を獻り、用ひられなば留るべし。もし又野水舟横りて、或は左右の為に阻れ、或は權臣能を狷み、賄賂によりて人を用ひば、速に去らんのみ。祖父の後はいまだ仕へず。いにしへの明君は、臣を擇て使ふといへり。今の世は臣も亦、よろしく君を擇ふべし。用ひられずはそれまで也。身を立んと欲する地、許我殿にのみ限るべからず、時宜に任せんと思ふはいかに」と問れて額藏感激し、「現潔き言葉なり。志氣あるものは、誰もかくこそ思ふべけれ。願ふは竊に消息して、その進退をしらせ給へ。某も遠からず、再會を期すべき也」といへば信乃は左手なる、笠を右手にとり直し「然らばこゝにて袂を分たん。盛暑ます〳〵烈しかるべし、みづから愛顧し給へ」と迭に心緒述あへず、竟に東西に別れけり。

安下某生再説、蟇六亀篠等は、既に信乃を出し遣りて、なかばは心を安くしつ、且共侶に目筭するに、「信乃は許我まで遣り著けず、途にして額藏が、大かたは結果ん。もし額藏が為損じて、返撃にせらるゝとも、彼一刀は贋物なれば、許我殿へ参るとも、何事をかしいだすべき。麁忽の罪科脱れかたくて、縛首を刎られん。そはとまれかくもあれ、一ト たび出てゆきしより、生てはかへるべくもあらぬ、信乃が事は後やすし。只便なきは、濱路が病著也。聘礼物を受てより、いまだ幾日も歴ざれども、軍木ぬしが密書もて、毎日に催促せらるゝに、既に信乃がをらずなりては、遅々して許さるべきにあらず。とかくに濱路を慰め賺して、疾遣嫁するにます事なし」と竊に商量する折から、又五倍二が使札來れり。蟇六は忙しく、封皮を折きてこれを見るに、きのふにかはらぬ縁女の催促、婚姻遅滞のよしを譴たる、怒氣文面にあらはれたれば、さらに十二分の鬼胎を抱き

て、書翰を亀篠に指示し、「彼方ざまの性急なる、わが意を知ざるに似たれども、信乃を出し遣りたれば、ともかくもなさばなすべし。われゆきて面談せんに、例の袴を出し給へ。いでいで」といひかけて、納戸のかたに赴けば、亀篠は先に立て、衣櫃の蓋とりあへず、麻衣袴此彼と、引出しつゝうち被すれば、蟇六は帯引締びて、袴を穿、刀を引提、外面に立出て、五倍二が使を労ひ「おん答は某が、罷出てまうすべし。誘給へ」と先に立して、軍木が宿所へ赴きけり。

さる程に亀篠は、とやらん、かくやあらんとて、思ひ過せばやすからぬ、心かゝりにいとゞしく、消しかねたる夏の日の、傾くまでに還らぬ夫を、いかに〳〵と待わびて、うち仰ぐ天に夕立の、外へ降けん雲霽て、横にさす日の影見れば、遣嫁には忌む申の時、生膾乾ておかねども、いそしく還る蟇六は、汗に塵挨を塗らして、背門より入るを、亀篠は、とく見て軈て出迎へ、「などてやかくは遅かりし、家にをるだに堪がたきに、炎暑さこそと推量らる。彼方の首尾はいかにぞや」と問へば蟇六微笑て、「彼処の一議は甚妙也。そは緩やかに譚るべし。さても熱し」と帯鮮捨て、汗の麻衣脱更つゝ、端居をすれば檐近き、妻は團扇をとり揚て、背のかたに立かゝり、あふぐを蟇六見かへりて、「亀篠措ね。殊更に、件の一議を急れたれば、斯安然としてはをられず。まづはやおん身に歡せん。曩にわれ、媒灼許赴きて、今朝稍信乃を遠離たる、豫ての苦心を密語て、且濱路が病著さへ、おちもなく告しかば、軍木ぬし聞果て、かゝれば共に後やすし。又新婦人の病著は、重やかなる事とも聞えず、婚姻の遅速は、わが一存に定めかたし。簸上殿に告べく思へは、且くこゝに俟給へ。ちよと、いて來ん、と會釈して、一僕を將て出てゆきぬ。かくて俟とまつ程に、大約一晌あまりにして、軍木ぬしかへり來つ、さていふやう、事の趣巨細に、簸上殿に告しかば、彼人歡び大かたならず、新婦人は病著に臥たりとも、昨今の事とし聞けば、風ひきたるにあらんずらん。然らば疾迎とりて、医療看病等閑なく、壻が手つから湯液を勸ん。これ即功を奏るの方なり。しかはあれども、主君在城し給はねば、いまだこの婚姻の願状をたてまつらず。且わが父身まかりて、いまだ朞月を過さゞれは、晴なる婚姻は憚りあり。よろづ省略を宗として、潜やかなるをよしとす。卜るに明日は、真に黄道吉日也。よりて壻入を相兼て、翌の宵、亥中の比及に、われ荘官の宿所に赴き、竊に新婦人を迎とるべし。かくて日を歴て婚縁の免許を請とも遅きにあらず。これは此、俗にいふ客分の新婦なれば、そが衣裳調度なゝどは、當坐當要の物をのみ、翌の黄昏におくらるべし。この趣を疾傳へて、こゝろ得させて給はせ、と叮嚀に示されたり。もし翌の宵に故障あらば、独和殿のうへのみならす、伐柯したる某さへに、腹を切るより外はなし。かゝれば當晩の勸盃は、省略に従れよ。新婦人を乗する轎子は、形の如く准備して、時刻を違ふ

べからず、といはるゝに推辞かたく、仰うけ給はり候ひぬ。さばれあまりに火急なり。濱路がそれまでおこたるべきや、量かたく候へ共、装ひもせず、化粧でも、厭ひ給ふことなくは、ともかくも仕らんと、兼引て退出たり。尓るを濱路が迷ひに惑ふて、ゆかじといはゞ福轉じて、禍一家に及ぶべし。安からぬは只これのみ。おん身且彼処へいゆきて、こしらへて見給へ」といへば亀篠、うち点頭、「荘官の女児でも、陣代殿を壻にすなれば、綺羅も調度も分に超たる、物の没匁の夛からん、と豫て思へばこれも亦、胷福病で侍りしに、壻殿の性急で、本銭の没らぬはよけれども、今いふて今濱路が、納得すべき欤、心もとなし。わらはが賺して事成らずは、おん身亦云云に、威し給へ」と耳語ば、蟇六これを聞果ず、「そはいはれずも胸にあり。とく〳〵ゆきね」といそがせは、亀篠はこゝろ得果て、濱路が臥房へ赴きけり。

さる程に、濱路は信乃が事をのみ、思ひは胸に結れて、臥房ごもりに夏の日も、わが身ひとつの秋の暮、心悲しくも磬蝉の、鳴音立限る腰屏風、臥て見つ、又起て見つ、霎時小襠にもたれてをり。浩処に亀篠は、障子をさらりと引開て、濱路がほとりに進みより、「土用なかばに何事ぞ、斯垂籠てたまる物かは。心つきなきものどもや」といひつゝ顔をさし覗き、「濱路は覚てをはするよな。食事はいかに、すゝみし欤。好しき物あらば、何にまれ進らせん。生平には嗜ぬ酒也とも、かゝる折には薬に侍り。氣を浮やかにし給はずや。信乃が起行にかゝづらひて、この三四日は事の夛きに、疲労て今朝はいぎたなく、起給はずと思ひしに、頭あがらぬおん身の病著、こゝろ休る隙もなし。なれども嚮に見つるより、湯液の效のあらはれて欤、大かたならず色もよし。かくては翌は瘥り給はん。すべての病煩ひは、その心より發るも夛かり。吾侪は醫師ならね共、その病症を猜したり。そは人にして人にあらぬ、信乃が痞になりたるならん。さでは鰒のかひもなき、片おもひにこそ侍るなれ。迭に稚かりし時、いひ名つけし事なきにあらねど、いかにせん、渠は親の横死を恨みて、年来大人を蟇六を仇とし寃へば、心に刃を磨ぐこと久し。その大悪心漸發覚て、人もをさ〳〵いふ隨に、里の衆人に疎れて、大塚の住ひ叶はず、許我へ参ると偽りて、実は逐電しつるなり。さるにより前夜に、神宮河なる漁舟、竊に大人を突落して、その身も續て跳入り、推沈んとしつれども、楫取の資によりて、大人は恙なかりしとぞ。こは鄙言にいふ行がけの、駄賃とやらんにあらんずらん。母がいふこと虚言欤、疑しくは額藏が、還らば渠に問給へ。骨肉の伯母、恩高き、伯母夫に弓を弯く、さる嗚呼の癖者が、まだ一宵も俱寐せぬ、その名ばかりの妻をしも、いかにして思ふべき。虎狼よりおそろしき、偽夫に操を立、病煩ふて二親に、苦労を被るを貞女といはんや。こゝの道理を辨へて、疾思ひ絶給へかし。彼畜生には百倍見あぐる、美男子に遣嫁せ

ん。おん身にはまだ告ざりし、その壻がねは別人ならず。いぬる月お宿せし、陣代簸上宮六ぬし、夲日おん身に懸想して、相応しからぬ舅を厭はず、枉ておん身を娶んとて、媒妁をもていはせ給ひき。その媒妁も歴々たる、属役の軍木ぬし也。その身上の軽重は、彼挑灯と洪鐘なれども、熟談すれば一家の僥倖。よる年波の二親まで、浮みあがらはおん身が孝行。否といはるゝすぢならねども、爹々は昔人氣質にて、おん身の胸を揣りかね、憎しと思へど信乃もをり、此彼に遠慮して、再三辞退し給へども、信乃が逐電しつる事、はや告るものありて、軍木ぬしより弥の催促。今は脱るゝ路もなし、已ことを得ずうけ引給へは、婚姻は近きにあらん。これに就てもその病著を、とく瘥りて二親の、心を休へたまへかし。今の世にして三才児でも、慾をしらぬはなきものを、惑ふて後悔し給ふな」と辞巧にこしらゆれは、濱路は忽地膽潰れて、堪ずやよゝと泣沈む、胸は板屋の玉霰、砕るうへに降そゝぐ、涙の雨に乾ぬ袖の、朽なば朽よ、わが良人に、何濡衣を被せらるべき。いかで釋んと篋糸の、弱るこゝろを激して、やうやくに頭を擡、「寔に思ひかけもなき、仇結びなる婚縁は、こゝろ得かたく侍るかし。とばかりまうさば親の事、思はぬに似て不孝也。よに人の子の道ならず、と叱らせ給ふ欤しらず侍れど、そを推辞るが親のため、子たるの道に侍りなん。犬塚ぬしをあしざまに、宣はするは舊怨を、忘れ給はぬおん疑ひの、鮮ぬ惑ひに侍るべし。十年に近く彼人と、ひとつ宿りに生育しかど、只二がたに疎略なく、進止ひ給ふのみ、悪心ありとは見も聞ず。ひとつ宿りに侍りぬる、わらはがしらぬ彼人の、中心を一ッ家にあらぬ、人がしりつゝいふよしあらんや。そは怨あるものゝ、讒言に侍るめり。さる人ながら二がたの、御こゝろに稱ずとて、追遣ひ給ふとも、一旦結びし縁しあれば、わらはが為に夫といふもの、犬塚ぬしの外になし。又彼人は故ありて、よしや逐電し給ふとも、離別状を給はらで、他し夫に見えなば、其は密夫に侍らずや。われ淫婦に侍らずや。譬ば親の仰也とも、夫婦の道は殊さらに、重きがうへの小夜衣、つまをかさねて誰が為に、不義の冨貴を樂ふべき。又彼人は名のみにて、まだ倶寐せぬ夫也、婚姻せねば、と宜はすれ共、初わらはを妻して、職禄をさへ讓らん、と宣はせしよしは、親の御こゝろ一ッに侍らで、里の衆人媒妁したる、證据は夥あるにあらずや。かゝればいまだ婚姻せずとも、夫婦ならずと誰かはいはん。犬塚ぬしが離別状を、手つから逓与し給はでは、親の仰に従ひがたし。許させ給へ」と理を推して、いとも怜悧くいひときし、雄々しき言葉の露の玉に、親の威光は、けおされて、亀篠は一句も出ず、腹うち立て呟くのみ。せんすべなげに見えしかば、外面に竊聞したる、蟇六は衝と進み入りて、妻のほとりに礚と坐し、潜然として鼻うちかみ、「亀篠何も宣ふな。やよ濱路、親恥しきおん身が貞実、彼処にてつばらに聞つ。慙なる事いひ出さして、母はさら也われ

も亦、後悔こゝに立ざりき。老てはよろづ慾ふかく、恩をも義をもうち忘れて、おん身が為に道ならぬ、婚縁を結びしと、情由えしらねば恨みもせん。世の常言に、親の心を、子はしらずといふを聞ずや。総角より養育せし、信乃が真の人ならば、何煩悩を發すべき、歹も好と思ひしは、夫と憑むおん身が迷ひ、親に女才があるべき欤。渠が事は恨むも甲斐なし、既に信乃がをらずなりては、陣代殿の懇望を、推辞に難き手詰の縁談、長き物には必纏れ、巨樹の蔭には必裊はる。否といへば身ひとつならで、忽地妻子に祟あらん。おん身が心はしらねども、當坐逃れに羨引しは、けふの亭午の事なるに、聘礼物を、はや贈られて、且客分にて迎とらん、と卒日を促す縁家の性急。おん身が心ひとつもて、今に至て変改するとも、そをそがまゝに許されんや。壻殿は陣代なり、媒妁は属役也。一ト たび怒らばこの一邨を、空巣にせんも易かるべし。六十に及びて一家の滅亡、そも命運にはあるべけれど、妻を殺され、子を殺されて、われ亦死しては竟に益なし。されば覚期を究めたり。聘礼物を受納めし、麁忽をいひとくわが皺腹、切るより外に術もなし。南無阿弥陀佛」と唱へもあへず、刃を晃り、と引抜て、腹へ突立んとしたりしかば、亀篠は吐嗟、と叫て、肘に携り禁れば、濱路も慌忙ひつゝ、「おん憤はさる事也。且この刃を放給へ」といへば頭をうち掉て、「いな〳〵放さぬ、殺せ〳〵」と狂ふをやうやく亀篠が抱締めて、傍を見かへり、「濱路は灸を押す如く、とばかりしては事果ず。親を殺すも、殺さぬも、おん身が心ひとつにあらん。禁るばかりが孝行欤。鈍しや」と叱られて、玉なす涙をふり拂ひ、「よしや貞女といはるゝとも、又唯不孝の子とならば、いづれ人たる道は缺なん。仰に従ひ侍るべし」といへば亀篠点頭て、「賢きものぞ。聞給へ、信乃が事は思ひ絶て、簸上殿へ、とうけ引侍り。刃を納め給へかし」といふに蟇六拳をゆるべ、「尓らは濱路は聞わきたるな。もし偽らばわれ今死ん。後に変改せんとならば、禁めずに殺せ」と期を推せば、「そは物体なきおん疑ひ、仰に

【挿絵】 「自殺を示して蟇六濱路を賺す」「亀さゝ」「ひき六」「はまぢ」

従ひ侍るべし」といふも涙にうち曇る、声を飲てぞ伏沈む。しすましたり、と蟇六は、含笑つゝ亀篠に、目を注して刃を納め、披きし衽を合すれば、浮雲き事や、と亀篠は、夫のほとりを立はなれて、泣沈みたる濱路が背を、掻拊つ又湯剤を勸めて、子にも求めのあり皃に、不問語も阿諛の、言葉巧に慰めけり。

かくて二親、迭代に、通宵看病したりしかば、死んと思ひ決めたる、濱路は絶て便りを得ず、うち護られて夜を暁せば、はや十九日になりにけり。されば今宵は壻殿の詣來給ふと仂なく、主の蔭話いひ誇らかす。奴婢が口には閉られぬ、戸障子の拭掃除、釘よ、紙よと罵りて、粘を搨音、

鉄槌の、打ば響くと譬に違はず、濱路ははやく洩聞て、こは浅ましや今宵の事を、わらはにはなほ二親の、隱し給ふは出抜て、その婚姻の盃を、とり結せん為なるべし。とてもかくても存命て、仇し夫に伴れじ、と豫て思へばなか〳〵に、うちも騒がずけふは稍、快き面色して、紊れし髪を掻拊つ、臥房の内に結び直す、髪もこの世に別の櫛の、歯を挽く如き、家内の奔走、この黄昏におくり遣す、濱路が調度のとりしらべ、或は饗膳酒食の儲に、主従暇なき物から、亀篠はをりをりに、濱路が臥房に立よりて、その安否を問慰め、みづから結髪せしを見て、心の中竊に歡び、原來今宵の壻入を、まだしらせねども洩聞て、渠こゝろまちするにやあらん。はじめの辞に似げなきは、寔に少女ごゝろぞかし。かくてはいよ〳〵後やすし、と思へば夫に密語にぞ、暮六も亦歡びつゝ、軈て臥房にいゆきて見るに、現とり揚し手束髪に、西施が病る風情あり。化粧ぬ夏の冨士額は、わが子ながらに見あげたり。三國一の壻入を、しられたりともその期まで、告ずもあらん、と深念しつ、他し事に紛して、又外面へ走り去、「彼はそれせよ。你はこれせよ」と罵りつ、又焦燥つ、人梯かけて譴使ふ、眼口に暇なかりけり。

里見八犬傳第三輯巻之三終